

令和元年度（2019年度）第1回
北海道史編さん委員会政治・行政部会議事録

日 時：令和2年（2020年）3月26日（木）15:00～16:50

場 所：かでの2・7 810A会議室

出席者：山崎部会長、前田委員

事務局：鶴原室長、山本主任

1 開 会

2 議 事

- （1）各委員の進捗状況報告について
- （2）資料編1（政治・行政編）の主要なテーマについて
- （3）その他

3 閉 会

1 開 会

【山崎部会長】

- ・2019年度第1回道史編さん委員会政治・行政部会を開催します。

2 議 事

(1) 各委員の進捗状況報告について

【山崎部会長】

- ・この間、こういった形で資料を集めてきたかということについて、事務局から簡単に説明願います。

【事務局】

- ・山崎委員と前田委員の収集資料を時系列で一覧にまとめた。山崎委員の資料収集は、主にインタビュー前にその方に関係する資料が収集されている。なお、インタビュー結果についても、インタビュー録としてこの中に収めている。
- ・前田先生は委員就任直後から、短期間に道内外様々なところで文書資料を収集されている。※を付けた、1番田中敏文関係文書と194番の大韓民国の国立外交院所蔵資料日韓漁業問題関係資料の2つは、道史の調査ではなく前田先生の研究の成果をご提供いただいたもの。道史に活用するかどうか固まったあとで、所蔵者から許可をもらうなどの必要な処理を行う。

【前田委員】

- ・承知しました。3番・4番も私がたまたま古本屋で購入して北大附属図書館に寄贈したもの。保安隊の北方防衛についての報告書と、日鋼室蘭争議のときに警察側がそれをどう見ていたかという資料。それ以外は道史の資料調査で収集したもの。

【山崎部会長】

- ・私の方も、この間は関係者へのインタビューが中心だったが、インタビューに前後して、事務局にインタビュー関係の資料を相当集めてもらい、それが収集状況表に反映されている。ここには出ていないが、北海道新聞の関連記事もインタビュー前に相当集めてもらっている。
- ・関係者へのインタビューは予想通りの形で進めることができ、進捗状況には満足している。この3月にも3名の方にインタビューする予定だったが、残念ながらコロナ騒動で順延になっている。最初に立てた方針である、道政に直接携わった方々、市町村関係者、中央省庁の行政担当、また北海道に直接関わった自治省関係者へのインタビューで、多角的な視点を得ることができ、今後の資料編・通史編の作成に非常に役に立っている。
- ・前田先生の資料収集はまだ着手段階ということか。

【前田委員】

- ・あとこの1.5～2倍くらいは必要。『北海道史への扉』で山崎先生も書かれておられたが、60年代以降になると制度化が進んで大きな政治対立になりにくく、一次資料も集まりづらいが、前半の時代を担当する以上、一次資料を精力的に集めようと思っている。道史編さん大綱でも、「日本の中の北海道」「世界の中の北海道」の位置づけが重視されており、内政・外交問わずまた道内・国内に限定せず資料を収集する。第二次大戦後の地域開発としてはイタリアの南部開発のような他国の事例とも比較可能で、国際関係では米ソ冷戦の前線にあった地理的特性を反映した、いわば「グローバル北海道史」をめざしたい。
- ・柱は、政党、利益団体・圧力団体、外交・国際関係の3つ。政党関係は、戦後北海道では長く革新が強かったこともあり、社会党を中心に道内外で相当集めた（浅沼稻次郎や鈴木茂三郎の

私文書がとくに有用)。自民党の党関係については機関誌『開発時報』や『自由民主党北海道連二十五年の歩み』など興味深い文献があったが、一次資料は三木(武夫)派のものを多少集めただけで、まだこれから。利益団体関係では、農業団体と労働団体。とくに北海道農民同盟(連盟)は北海道政治史の鍵だと考えているが、十分調査が及んでいない。国際関係では防衛問題と漁業問題・領土問題が重要で、ほかに世銀借款問題などもある。ただ、外務省の公文書は70年代、80年代のものも公開されている反面、防衛は基本的にオーラルヒストリーに頼るしかない。敗戦直後の混乱状況も含め1945年までは一次資料があるのだが、戦後の北方防衛や米軍と自衛隊の分担については、再軍備に関わった旧軍人の私文書に若干出てくるくらいで、今後の作戦を考えないといけないと思っている。アメリカの対日占領政策・極東政策の資料を広く収集した国立国会図書館憲政資料室や沖縄県立公文書館での調査に加え、場合によっては英米の国立公文書館からも今後資料を取り寄せる必要があるかもしれない。

【山崎部会長】

・それでは引き続き、お互いいろいろな調査をしながら集めていくということによろしいですね。

【前田委員】

・はい。

(2) 資料編1(政治・行政編)の主要なテーマについて

【山崎部会長】

・前田委員と私との分担は、時代ごとに分けるという粗々のコンセンサスはあったが、ただ時代を超えて連なるテーマもあるので、確認をしておいた方がよいだろうと部会の議題にさせてもらった。資料2について、事務局から説明してください。

【事務局】

・検討の参考にさせていただくために、政治・行政でテーマになりそうなものを年表から拾って資料にした。細かい部分で落ちているところはたくさんあるし、事件的なものは載ってくるけれども、長いスパンでの事象的な物事は載ってこないところがある。分類は、一般的な出来事、道政、財政、市町村、開発行政、軍というところでは、進駐軍や自衛隊に至るまでのことや基地問題を含む。対ソ対ロ、それからアイヌを加えた。

【山崎部会長】

- ・全体を鳥瞰するにはまとまった図表で、これに入っていないといけないとか、これを精緻化するというのではなく、私と前田先生の作業で全体を漏れなくやっていくというところでは、こうした流れかと思う。
- ・私も道政関係者に対して行政・財政のこの間の変化を伺ってきたし、市町村関係者へのインタビューも断続的に行ってきた。開発のところはこれまでいろいろとやってきたが、もう一度見直ししながら肉付けをしていく。
- ・今回前田委員と視点を合わせながらやっていかなければいけないと思ったのは、自衛隊等の軍の関係、対ソ対ロの国際関係のところ。時代でテーマが切れるということではなく、変化しながら連なっているところがあるので、認識や情報を共有しながらやっていくことが必要。さらに、私も横路道政のことで関係者に話を聞く中で、冷戦の崩壊と対ソ対ロ関係というのはこれからの道史編さんのポイントになるのではと認識を新たにしました。
- ・まだ手が回らないところではあるが、米ソ冷戦が北海道にどのような陰を落としたかというところでは、自衛隊等の軍関係と、一番右側の「引揚げ」ですかね。ただ樺太や千島から帰って

きましたというふうになるのか、『北海道史への扉』でブルさんが書いていたように、その後どうしていったかとか、あるいは樺太関係者団体がその後運動を展開しているといったところを含めて、射程を長く取って見るというのにも必要かと思っている。

【前田委員】

- ・今3点挙げていただいた「自衛隊等の軍の関係」と「対ソ対ロの国際関係」、それから「人の移動」というか、引揚げを経て人びと（の記憶）が社会に定着していき、またナショナリズムの運動を新たに組織化していくプロセスは、いずれも冷戦（とその崩壊）という文脈のなかに北海道史を位置づけるうえできわめて重要だと考えている。冷戦状況のみならず、ポスト冷戦状況から戦後北海道の政治行政の変化を捉えるというの、従来あまり意識されてこなかった新鮮な視角だ。
- ・技術的な点で気になるのは、片方の時代の担当者が重点的に取り上げたトピックが、もう片方の時代では同様の密度で取り上げられないようなケース。例えば、「道政」や「開発」の欄はくまなく年表に挙げていただいているけれども、「財政」は1970年以前の事件がほとんどない。私の時代に「財政」は政治行政の主たる争点にならなかったということによいのか。「開発」と「財政」は実際には連動していると思うが、前者は私と山崎委員とで時期で機械的に区切り、後者は山崎委員がもっぱら論じるということになると、両者の相互関係が読者に見落とされてしまうようなことがないか、やや気にかかっている。

【山崎部会長】

- ・制度改正だとか何かの事件ではないにしても、北海道の財政が厳しかった時代はずっとあった。例えばそうしたことがどういったところに表れるかというと、年表では出て来ないけれども、1967～69年あたりに北海道開発特例を見直すということが国と道との間で議論されている。直轄事業やその他の補助事業も含めて、他府県に比べて相当地方負担率が軽かったり、場合によってはないものもあったけれども、北海道の開発も相当進んできたのだから、応分に地方負担も増やさないという議論があって、そうしたところで開発と財政が連動してくる部分ですね。そうした形で付け加えていくようなことが、いくつか出て来ると思われる。

【前田委員】

- ・なるほど、年表に上がるような財政制度の改正ではないにしても、北海道開発政策が大きく見直しされるタイミングで、道の厳しい財政事情や、逆に他府県より負担を免除されてきた事情が少なからず作用してきたということですね。そうした「開発」と「財政」の連動する部分は、今後双方で通時的な理解をすり合わせていく必要がありそうだ。
- ・それから、先の山崎委員の論点に戻って付け加えると、ソ連・ロシア要因はたしかに冷戦初期の私の時代のみならず、新冷戦から冷戦終結・ソ連崩壊を経て現在のロシア連邦にいたる後半の時代でも重要なことをあらためて気づかされた。1990年代の北方領土問題の進展などは象徴的。軍・自衛隊の方は後半の時代、とくに平成に入ると、北部方面に冷戦期のような精鋭を集めるということとはなってくると思うけれども、論じるべきトピックというのはありますか。

【山崎部会長】

- ・例えば、自衛隊駐屯地の再編みたいなのを市町村の視点から論じていくというようなことが一つ。もう一つは、沖縄の基地負担軽減で、1997～98年から海兵隊の実弾演習をやるようになり、冷戦の崩壊や日本の安全保障政策その他が、北海道に反射的に影響してきている。矢臼別演習場での反対運動は社会・文化で扱うことになると思うけれども、政治・行政編のところで

も抑えておくべきところがあれば、今後作業として出てくる。

【前田委員】

- ・沖縄ファクターは私は全然考えていなかった。たしかに、72年までは基本的に施政権は米軍が持っていたのが、72年以降の日本の安全保障政策では北海道と沖縄を両睨みするような変化が生じているはず。冷戦終結後にはそれがもう一度再編されてきていると思うので、まさに沖縄からの「反射」というか、北海道と結びつける視点はものすごく重要だと、伺っていて思った。
- ・話題を変えて、私は前半期では特に社会党とか、革新勢力の方に力を入れて書くことになると思っているけれども、例えば社会党道連からほぼそのまま移行した民主党道連というのは全国の民主党でもかなり強かったと思う。そのあたりを後半の時代で触れられるご予定はありますか。

【山崎部会長】

- ・前田委員は政党のところはかなり掘っているけれども、私は行政学者だから、正直行政の方ばかり見ていたところがあった。いわゆる政党の幅広い活動の実態を抑えておくのか、それとも道議会の活動みたいな所に収斂させて記述した方がいいのか、その辺りは私もあまり考えていなかったところである。

【前田委員】

- ・私も前半で、道議会の話に落とすのか、もう少し広く全国的な政党間競合も含めて書くのかというのは悩んでいた。炭労等もどんどん弱くなって行くし、いくら民主党王国と言っても長期低落傾向にはあるので、五十嵐広三が官房長官になったりとか、そういった形で北海道の革新勢力が全国的影響力を持つことがあると思うけれども、横路道政が終わった後は政党の動向にあえて力点を置いて道史を叙述する必要はあまりない気がする。

【山崎部会長】

- ・細かいことを言うと、「社会党から民主党」だとか、「自民党も地崎・中川の時代とその後の時代とでは中身が違う」とか、いわゆる政党政治研究みたいところまで掘っていくのか、あるいはそれはそこそこしておくのか、その加減ですね。地方の政党組織の歴史的な形成とか、あるいは展開という所まで抑えて、それを道史に反映させるかどうか。

【前田委員】

- ・地方の政党組織の歴史的な形成については、自民党・社会党とも触れる予定。ただ民主党道連の強さとか限界も、60～70年代くらいまでにその原型はできている気がするので、80年代以降に徐々に影響力が落ちていくことはあっても、浮上してくる何か新しい現象というのではないかと思う。自民党についても、まさに地崎・中川時代の77年参議院選挙で「道連主導型の強力な戦略指導が初めて発揮」「道連史上に輝かしい金字塔を樹立」と自民党の道連史が誇っているように、70年代には制度化されたのかなと。だから後半の時代でも政党政治の動向をもちろん概説的には追えるだろうが、そういう線を超えて書くべき余地はないかもしれない。連合などの労働組合史についても同じだろう。

【山崎部会長】

- ・労働組合ということにしてみると、それは産業・経済編の方になるので、我々は政党政治、それも北海道の地方政治に結びつくような記述になる。ただ前田委員がやられていることは、今まで当たり前のように思われていたことにもう一度光を当てて掘りなすと、新しい知見が出てくるというところ。そうしたところをきちんと反映させるのは大事。今のスタイルでちょっとやってみますか。

【前田委員】

- ・とりあえず、そうですね。

【山崎部会長】

- ・それで私の方で政党政治のところが足りないとか弱いとかいうことであれば、もうちょっと掘ってみたり探してみるということで。

【前田委員】

- ・北海道新聞社から 1991 年に出された『北海道政治地図』。ああいう仕事は、けっこう貴重な気がしている。

【山崎部会長】

- ・そうですね。道新の特集などで、特に統一地方選挙の前あたりに単発的にはやっているけれども、その後本になるほどはやられていない。

【前田委員】

- ・北海道大学にいた荒木俊夫先生の政治意識に関するお仕事も 70 年代くらいまでですね。

【山崎部会長】

- ・定点観測が系統的・継続的にやられているわけではない。政党政治の展開、変遷みたいところは、今までの道史では弱かったところもあるので、そこは留意してやっていきましょう。

【前田委員】

- ・あと前半と後半で、北海道史の明るさというかトーンが変わる印象がある。前半は、北海道が全国から期待を集めて上り調子というか、戦後復興の雰囲気の中かで開発に知見のある革新系が伸びたり、結党前後の自民党でも大物が開発庁長官に据えられたり、大蔵省にも河野一之ら北海道のシンパがいたり、国のお金も集まって地域として大きく発展していく部分を強調した書き方にどうしてもなと思う。逆に後半は、一般府県とは異なる特別扱いが失われはじめ、北海道経済も深刻化し、大変なことが山積してくるような時代になってくるけれども、後半のトーンで意識されていることは。

【山崎部会長】

- ・今おっしゃったこともあるけれども、道庁が主役であったところから、市町村や多様な担い手が出て来て、多元化していく。道と国との関係も、昔の方が国と一体的で、前田委員の時代と私の時代とは変わってきていると思う。そこまで書き切れるかどうかわからないけれども、国との関係や国の政策が北海道に対して与える影響は、かなり変わってきている。

【前田委員】

- ・市町村などが、ある種自立的なアクターとして道庁を通さずに国と直接交渉したりとか。

【山崎部会長】

- ・今日的ないわゆる道庁スルー現象みたいなことはまだないけれども、横路・堀知事の時代は、上下主従関係だったのを対等協力にやっていたところで関係が変わってきたという経緯は、関係者の証言で跡付けることができた。

【前田委員】

- ・いまのお話を伺って、私は前半と後半の時代像のコントラストを明るさ／暗さとは別の角度でイメージすることができたと思う。私の時代は、北海道内であればまず道庁・道議会など札幌に行くし、また全国であれば東京の霞ヶ関・永田町に陳情するしで、非常に中央指向的というか、東京を核とする集権的な利益誘導体系に乗ることで北海道が伸びていくようなところがあった。その体系の中かで政党も圧力団体も道庁も活性化してきた。それが高度成長も終わって

時代が変わってくると、おっしゃるような分権化・多元化の波というか、以前は必ずしも対等ではなかった道内各地域のアクターが道に対して、また道も国に対して、自立的に動かないといけなくなってくる。それは時代の転換を描くうえで大事なポイントだという気がした。

【山崎部会長】

- ・北海道総務部に、今は市町村課になっているが、昔は地方課があった。道庁が市町村を地方とみている。言ってみれば、自治省の北海道版の役割を果たしながら指導監督統制をやっていたわけだが、それが80年代からどんどん変わってきて、さらにそれを加速させることになるのが2000年から始まる地方分権改革。そこは一つの大きな潮流として書くことが出来るのではないかと、今までの聞き取りを通して確信している。
- ・もう一つ、本当であれば官とか行政の役割が小さくなって、規制緩和や民間活力の時代などとさかんに言われた時代があつて、道も民の力を引き立てたり、民の力を大きくしようとはしている。けれども、なかなかそれがうまくいかず、例えば民間の発案で出来た航空会社の経営が傾いて、結局道が融資しないとうまくいかないという事例がある。民の力を最大限発揮しながらやって行こうというのは横路知事の最初の頃から言われてはいたけれども、実態は伴わず、一つの時代も自立が宿題になっている。特に堀知事の1期目で拓銀が経営破綻したということもあり、ここから北海道の財政難が始まるので、そうした意味で、「国の役割が小さくなる代わりに、北海道や道内の民間の力が大きくなって新しい時代になりました」とクリアに書き切れない、なんとも言えないもやもやとした形になる。歴代の知事はそのときどきでご苦労されていたんでしょね。

【前田委員】

- ・自治省の北海道版という世界観から、地方分権改革へいたる巨大な変化が80年代に準備されていったというのはとても面白い。その中央―地方関係上の大きな潮流と、他方で市場の力を引き出そうとする新自由主義の潮流が交錯するのも、一筋縄ではいかない道行財政史の複雑さを感じさせます。後者で謳われた民間の活力といった標語が、歴代道知事の努力にもかかわらず空転していくような流れは、ここ30年くらいの大事な特徴で、「自立を巡る苦闘」というのは後半の大きなテーマかもしれませんね。

【山崎部会長】

- ・私が田中知事の時代からの道政全体を見て思うのは、「自立の追求か豊かさの追求か」という政策課題がいつの時代でも問われ続けていたという点である。豊かさで言うと、国から財政支援を取ってきたりいろいろなやり方があるけれども、そういうやり方じゃなく民間活力の導入をはじめ自立を試みるのだが、しかしそれが上手くいかないという現実と直面する。だから横路道政の時も国との関係での地方分権改革はそれほど進んでいなくて、1993～94年くらいからようやく全国的な流れとともに地方分権の時代に移行している。

【前田委員】

- ・北海道はその二つの目標のあいだで長く議論を重ねており、豊かさの方を追求する場合にも、必ずしも国に頼らない方途を模索してきたものの、地方分権の時代以前には十分な制度的基盤が整わなかったのです。しかも、高度成長期まではパイが国にあった。戦後北海道は政治力を結集する風土があるので、政党も北海道開発庁も予算を取ってくることに非常に長けていた。取ってくる予算がなくなってくると、自立をある程度目指さないといけなくなる。でもそれもううまくいかなくて、という話。

【山崎部会長】

- ・82～83年に北海道経済がどん底になったとき、「国にぶら下がっているような今までの道政じゃだめだ。だから自立しないといけない」という意識がものすごく高まって、だから横路知事への期待が高まったという背景があるが、ただそうした横路知事とて国からお金を取れない知事というわけにもいかないの、対中央折衝でお金を取ってくるというのもあるし、国から配られるお金をわざわざ地方の側から「要りません」というのはまずありえない。86年の円高不況の頃から財政が膨らんでくるし、90年以降になると今度はバブル不況対策でものすごい勢いで膨らんでくるんですね。開発予算でも拓銀の破綻が97年だから、98年がピーク。だから小泉政権が出てくるまでは国も地方も財政規模を膨らませていて、北海道もこのままでは借金が多くなって大変だということがわかりつつも、でも景気対策を国から言われたら断るわけに行かない。そういう時代ではないことは今から40年近く前から言われてるのに、中央からの財政資源の蛇口がぱっと切れたら違うんですけれども、いつの時代も流れる。北海道開発庁を無くしてくださいみたいなことも、北海道の側からは一言も言っていない。そういう時代状況の中で道政を担うところがあったのではないかな。

【前田委員】

- ・中央からの財政資源の「蛇口は流れ続けていた」というのは、面白い比喻というか、なるほどと思う。「ぱっと切れた」イメージをどこか引きずっていたので。とすると、小泉改革が本格的に始まるのがエピローグになるという感じですか。

【山崎部会長】

- ・正確にはまだきちんと見ていないが、98年がピークで、99～2000年頃はまだ拡大基調だったので、小泉構造改革が本格的に始まる頃からはではないか。ただ堀知事の2002～2003年の頃はもう北海道は財政再建をしなければいけないという動きは始まっている。

【前田委員】

- ・革新自治体みたいなものは、地域による自立の動きの前史というか、横路知事の施政の前史として位置づけられるのか。

【山崎部会長】

- ・位置づけられると考えている。そうした蓄積、経験があって、横路道政以降の市町村との関係の変化等が見てとれる。横路知事の最初の頃の選挙公約を誰がどう作ったのかを見ていくと、五十嵐広三氏が知事選に2回出た時代に検討していた政策公約が、継承されている部分もある。

【前田委員】

- ・さっきおっしゃった、各市町村が道庁から相対的に自立してくるといった横路道政以降の変化も、革新自治体の時代にそういう志向があったということか。

【山崎部会長】

- ・革新自治体にもあったし、堂垣内道政の1981～82年の頃から、市町村の振興政策を道としてもサポートしないとイケないという動きは、実はもうあった。だから、堂垣内知事の時代には市町村との連携は全くなくて、横路道政から突然出て来たというわけではないが、ただ横路道政のときに相当加速させたというところはある。道で市町村振興の制度や補助金ができたとところは、資料で跡づけることはできる。

【前田委員】

- ・五十嵐広三については、道史の中ではどういう位置づけをされるのか。

【山崎部会長】

- ・やはり市町村が地方自治の担い手というところで、旭川市政というところが一つ。

【前田委員】

- ・道内の革新市長のなかでも、そうした流れを劇的に体現した人物として。

【山崎部会長】

- ・帯広、旭川、釧路と出ているけれども、一番分かりやすく書きやすいのは旭川ではないか。
- ・それから、アイヌ政策を北海道の側から国に提言提案した主たる担い手は、歴代の知事だけなのか。五十嵐市長のような市町村関係者がいるのかをきちんと辿って、政治・行政編のアイヌ史のところでは、そのときどきの政治家の果たした役割が明らかになると面白いと期待している。

【前田委員】

- ・そうですね。それは小川委員の領域とどのような書き分けになるのか。

【山崎部会長】

- ・そこは小川委員におまかせする。でも我々の方で、こうした事実が明らかになったとか、こうした視点での仮説があるがどうですかといったことは、折に触れてお話させていただければと思っています。
- ・あとは、事件事故や災害を、道政や開発等との関連でどこまで入れるか。93年の南西沖地震の他に思いつくのは1977年・2000年の有珠山噴火、52年の十勝沖地震、72年の札幌オリンピック。

【前田委員】

- ・災害でいうと北海道は冷害の政治的比重が戦後結構大きく、そこでいろいろな利益団体が結構頑張ったりする。前半の方の話になるかもしれないが。

【山崎部会長】

- ・後半のところでも冷害でえらく寒いときがありました。
- ・では基本、こうした項目をこれからも継続して掘り下げていくということによろしいですね。

【前田委員】

- ・はい。

(3) その他

【山崎部会長】

- ・あと一つ確認しておきたかったのが、自治体史は学術論文ではないので、引用註などの用い方のイメージを二人で合わせておかないといけない。

【前田委員】

- ・天川晃先生らが書かれた『横浜市史Ⅱ』は、結構びっしり註がついていた。出典はある程度、特に大事なものであったら明記していた方がいいという気がする。見やすさという点では、その場で括弧で本文中に出典を書くのがいいのか、章ごとがいいのか。また研究整理などは入れず、ただ出典のみの簡単な註を参考文献一覧のアップデートみたいな感じで載せるのがいいのか。論文ではないので、何頁から引いたのか、頁数までは書かなくていいと思うけれども。

【事務局】

- ・通史編は全部会での調整が必要になるが、今までは資料編の構成が中心だったので、通史編の書きぶりというのはまだ全然検討していない。それによっては資料編の解説の書きぶりが違うというのもあり得るので準備に入った方がよいかと思う。註については、最近の傾向では、本文の中に入れない形が多い。

【前田委員】

- ・引用文献みたいな形ですね。

【事務局】

- ・ここの部会の中ではこういう形がいい、というたたき台を出していただけると、全体にも諮りやすい。次の部会までに参考材料をもってきて、並べて見ることにしますか。

【山崎部会長】

- ・そうですね。それによってどこまで緻密にやっていかないといけないかが明らかになる。
- ・今後資料編に入れるインタビューについて、例えば国から北海道をどう見ていたのかというところで、追加的に、インタビューを行えればと考えている。

【前田委員】

- ・ぱっと浮かぶわけじゃないけれども、山崎先生は以前ミグ 25 事件（ベレンコ中尉事件）に関心があるとおっしゃっていた。

【山崎部会長】

- ・この機会に改めて洗い出せば面白いのではないかと考えている。

【前田委員】

- ・資料があればいいですけども、警察関係の方でインタビューに応じてくださる方がいれば大分助かる。警察（道警）と防衛（北部方面総監部）は、インタビューを通じないとなかなか雰囲気わからない。
- ・あと、道新が何か資料を持っていないかなと思っている。朝日の記者の日記を昔閲覧したことがあるので。初期の道新だと、木村禧八郎という経済通の論説委員長が、その後岡田春夫などとともに労働者農民党という最左派の政党に入って、代議士になったりしている。現実政治に働きかける人もいた道新というメディアが、少し気にはなっている。

【山崎部会長】

- ・どこまでのものが出てくるか。昔であれば高橋昭夫さんみたいな、そういう方がその後も居たら良かったんだろうけれども。私の時代に関しては、当事者にまだ話を聞くことができる。記者には、記事として書き切れなかったところや取材のエピソードなどを聞くことで手がかりになるかもしれない。

【前田委員】

- ・ちょっと話が戻るけれども、終戦直後の知事の引継文書を見たが、当時はまだ警察は内務省の所管なので、知事まで報告が上がっていて、いろいろ複雑なことが書かれている。ただその後は知事から切り離されて報告が上がらなくなるので、1947～48 年くらいからの警察のあゆみについては『北海道警察史』くらいしかなく、手がかり自体がつかめない。道立図書館に『北海警友』というなかなか面白い機関誌が揃っており、もう少ししっかり調べる必要がある。未読分では北部方面隊も新聞（『あかしや』）を出している。

【山崎部会長】

- ・探すとそれなりに出てくるものなんですね。

【前田委員】

- ・ミグ 25 に関しては自衛隊側からわかりそうですか。

【山崎部会長】

- ・自衛隊側にはなさそうで、道警の方かもしれない。
- ・例えば、冷戦期の北方領土問題としてレポ船問題が、その後は、特攻船問題があったが、こう

した問題をどこまで実証的に書けるかという点、非常にハードルが高そうな気がする。

- ・裁判記録も活用できるのではないかと。新しい時代では新長計と不正経理事件、これも裁判記録があるはず。それと官製談合事件であれば公正取引委員会関係で何かあるかもしれない。
- ・対ソ対口も、水産行政を政治行政の観点からフォローしておくことも必要になってくる。

【前田委員】

- ・ちなみに、信漁連の会館の資料室を漁業ご担当の先生がご覧になっているようですが、議事録みたいなものも残っているようだ。
- ・裁判記録でいうと、長沼ナイキや恵庭事件には、深瀬先生とか北大法学部のスタッフが結構関わっている。最近、『平和憲法とともに―深瀬忠一の人と学問』が出て、西村裕一先生が「北からの平和」を寄稿したりしているが、その辺りからも何かわかるかもしれない。

【山崎部会長】

- ・寿郎社から出ている『北海道の重大事件史』という本は、行政事件や民事・刑事のいろいろな事件を、一事件あたり2頁くらいでまとめている。そこを最初の手がかりにして、事件を抽出するのがよい。

【前田委員】

- ・追加の情報だが、ウィリアム・アンド・メアリー大学の佐々木知行先生という方が、北海道の自衛隊基地反対運動について、英語で本を出されている。たしか道立図書館の恵庭事件資料を使っていたのではないかと。日本語で書かれている研究はあまりないので、そういう意味では貴重な研究かもしれない。
- ・時代の区分ですけれども、対ソ・対口関係はどういう感じで区切りますか。全部のトピックを一律に1972年区切りとするかどうか。

【山崎部会長】

- ・一律に区切るのは無理です。

【前田委員】

- ・200 カイリの影響で日韓で揉めたりするのがあるので、そのあたりまでは私の担当としても。冷戦終結前後からの北方領土とか、北方領土隣接地域措置法の82年くらいまでで切ってもいいかもしれない。

【山崎部会長】

- ・ありがとうございます。

【前田委員】

- ・全部を均質に切らなくても、テーマによっては少し前後したりするということですね。

【山崎部会長】

- ・そう。対ソ対口のところでは前田さんにずっと下ってやってもらうという役割分担はありえますね。あと自衛隊とか引揚げとかも、引揚げ自体は48年とかで終わるけれども、引揚げの後処理みたいなものはずっと連なる話になる。

【前田委員】

- ・サハリン棄民のような問題は北海道政に絡んでくるのか。

【山崎部会長】

- ・あれは国の話なのか。でも五十嵐さんは相当関わっていたようだ。

【前田委員】

- ・東大の大沼保昭先生はサハリン棄民に注目して1992年に中公新書にされている。ある種の戦後

補償の問題で、北海道の社会党系の人とかが呼応していた可能性はある。

【山崎部会長】

- ・一時帰国したときに会いたい親類縁者が、北海道に散らばっていたかもしれない。となると一時帰国した人達の対応をする事務局は北海道がやっていた可能性もあるので、そうしたところを含めてフォローしておいた方がいいのかもしれない。

【前田委員】

- ・あと徴用された9万人でしたっけ、道内の朝鮮人中国人の人たちは、単に送還して終わりじゃなくて、戦後補償的な問題はあったと思うし、北海道の数はかなり多いわけです。こういう「終わらない戦後」みたいなテーマは、結構長く引きずってくる。

【山崎部会長】

- ・そこは多分、社会・文化の方なのではないか。例えば、強制連行で連れてこられた人の遺骨の収集は今でもやっている。あと、希有な例ではあるが東川町では強制連行された人達の慰霊をきちんとしている。道政として書く必要があるものであれば、それは掘ってみて、探してみても出て来たらというところですね。

【山崎部会長】

- ・ほかに私からですけれども、部会長として申し上げたいのは、事務局体制を継続的安定的にさせていただくのはもちろん、いっそうの拡充、体制強化をお願いしたい。人事異動があるのは仕方のないことではあるけれども、ただ数年したら発足当初のメンバーが誰もいないということでは困る。形式的に引継ぎはされるかもしれないけれども、このときこういう議論をしたとか、こういう観点でやろうという認識や考え方をきちんと継続して共有しておかないといけない。我々の部会は2人だけれども、他の部会は何十人という体制がなくなってしまうのではと、非常に懸念している。事務局体制として、可能な限り継続性をもたせてもらいたい。
- ・もう一つ、これも懸念ですけれども、これから本格的な編さんになっていくときに、事務局体制だとか道史編さんに関わる予算が、足りなくなるような事態を懸念している。将来、事務局の人数も予算も減らすだとか、道史編さんの作業体制が脆弱なものになってしまうことのないようお願いしたい。北海道150年の非常に大事なプロジェクトであるので、財政難でぐらつかない安定的な編さん体制を確保し、さらには拡充強化するようにと、声を大にして申し上げておきたい。
- ・前田先生から何かありませんか。（ありません）
- ・事務局から何かありませんか。（ありません）

3 閉会

【山崎部会長】

- ・本年度の政治行政部会を終わります。ご苦労様でした。

(了)